雪野寺跡

京都府立大学文学部
助教授　菱田哲郎

《はじめに》

雪野山の西麓、日野川右岸のひっそりとした林の中に雪野寺跡は位置しています。その寺域の南半分は龍王寺境内となっていて、その鐘楼(しょうろう)にはおそらく雪野寺に由来する奈良時代の梵鐘(ぼんしょう)が釣り下げられています。『蒲生郡志(がもうぐんし)』に塑像(そぞう)の出土が紹介されたことを契機に、1929年に石田茂作が小規模な発掘をおこない、この寺跡の名を学会に知らしめることになりました。

そして、1934年から35年にかけて日本古文化研究所による発掘調査がおこなわれ、塔跡が確認されました。その後、ながらく調査はおこなわれることがありませんでしたが、京都大学文学部考古学研究室により1986年に地形測量、そして1989年から1991年にかけて4回の発掘調査が実施されました。その結果、塔跡が再確認されるとともに、新たに2基の基壇建物が明らかとなり、伽藍(がらん)の構成についての知見が増えることになりました。ここでは、調査成果を概観し、その意義を探ってみたいと思います。

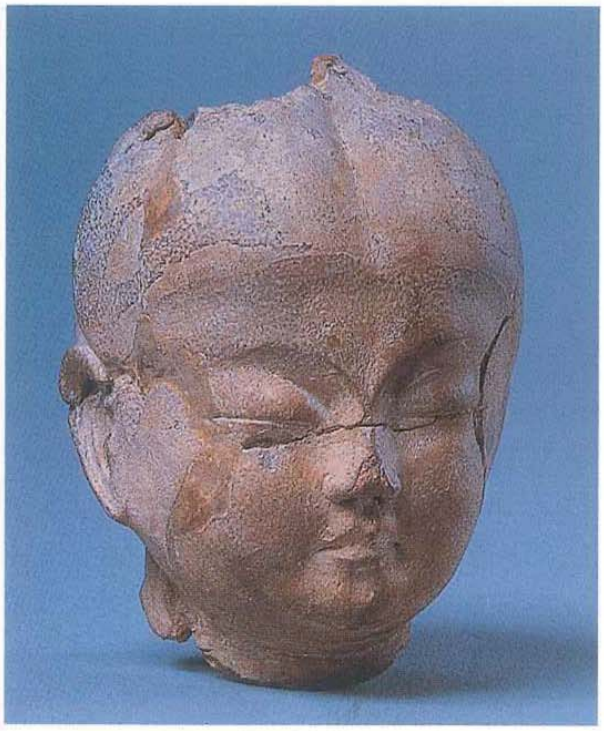

図1　塑像童子像　写真

《明らかになった基壇建物》

塔跡　古くから知られていた雪野寺跡の塔跡は、1930年代の調査時の姿そのままに地中に保存されていました。基壇はほぼ14m四方の方形で、上面には5個の礎石が遺存しています。それらはいずれも側柱(がわばしら)の礎石と考えられ、その結果、塔は7m四方の大きさであることがわかります。この規模から、五重塔の可能性が高いと考えられます。心礎やそのまわりの四天柱の礎石は失われていますが、龍王寺境内の庭に転用されている石材が心礎と伝えられています。塔跡基壇は、裾が雛壇状に2段になっており、それぞれ石積みの化粧が施されていました。とくに、西辺では基壇の裾に沿って暗渠(あんきょ)が作られ、その蓋石が整然と並ぶ構造になっていました。この暗渠は、基壇の南端で途絶えてしまっており、排水の機能も兼ねてはいるものの、基壇化粧の一部として作られたものと考えられます。塔跡の裾まわりの作り方をみてみると、さらにおもしろいことに気がつきます。先に触れたように西辺は入念な化粧が施されており、南辺もおそらく同様と考えられますが、北辺や東辺では下成基壇（一重目の基壇）に石が用いられて

図２　塔跡西辺の基壇化粧

図３　講堂跡の礎石

いませんでした。また上成基壇も北辺には大きな自然石を残すなど、手抜きが看取できます。これは、北側と東側は、すぐ背後に崖が迫っていることとも対応していて、この塔が西あるいは南から見るものであることを強く意識していることが明瞭です。なお、塔跡の周辺からは炭や焼土が出土することから、火災にあったことはまちがいありません。塑像も少量ながら塔跡から出土しており、塔本塑像群が火災によって素焼きになった結果、今日まで残ることになったと考えられます。

講堂跡　京都大学の調査によって新たに判明した建物跡です。塔跡の北西にまさしく軒を接するような位置にあります。塔と同様、北辺と東辺は崖が迫っており、その地形は寺院造営当初のものであることが確かめられました。塔跡の基壇は東西27.0m、南北16.8mの規模で、その上面で６個の礎石と６ヶ所の礎石抜き取り穴が確認されました。それらの位置から類推すると、桁行７間、梁間４間の四面庇建物があったと考えられます。柱と柱の間隔を調べると、桁行の間が2.7m（９尺）、梁間は母屋が2.55m（8.5尺）、庇が2.7m（９尺）で、全体では桁行63尺、梁間35尺の建物に復原できます（カッコ内は尺度は唐尺で換算）。

基壇の裾は、やはり面によって違いがあり、北辺と東辺では溝があるだけであるのに対し、西辺や南辺では乱石積であったことがわかりました。この建物も塔と同様、南や西を意識した構造であることが明白です。この建物からは古代の遺物のほかに、中世の遺物も出土しています。基壇上面にも再利用された跡があり、中世にも仏堂のような建物が建てられていたのでしょう。また、基壇土中からは７世紀前半までの土器が出土しており、この寺院ができる以前に前身の遺跡があったことがうかがわれます。

この基壇建物は、規模が大きいわりに柱間が比較的狭いことや、基壇の高さが0.5m程度と低いことから、これが金堂である可能性は低く、一つの寺院内で最大の建物となる講堂跡であると判断できます。礎石の大きさが塔跡よりもやや小さいこともそれを支持していると考えます。ちなみに、大津市の穴太廃寺の再建講堂とほぼ同規模です。

北西建物跡　これも新たに発見された建物跡で、講堂跡のすぐ北西に隣接した場所にありました。塔跡や講堂跡と同じく、背後の山の斜面をカットして、長方形の平坦面が作り出されていました。現状では礎石が１個残されるだけでしたが、礎石を据えた際の根石も検出されており、礎石建物があったことは確かです。基壇上面が削平されていましたので、建物の規模や構造の推測は難しいですが、柱間隔が2.4mで、講堂跡よりも狭いことがわかります。なお、基壇の東西は25.5mで、これも講堂と比べてやや小さい値です。

北西建物跡の周囲からは、須恵器や土師器を中心に比較的多くの土器が出土しました。

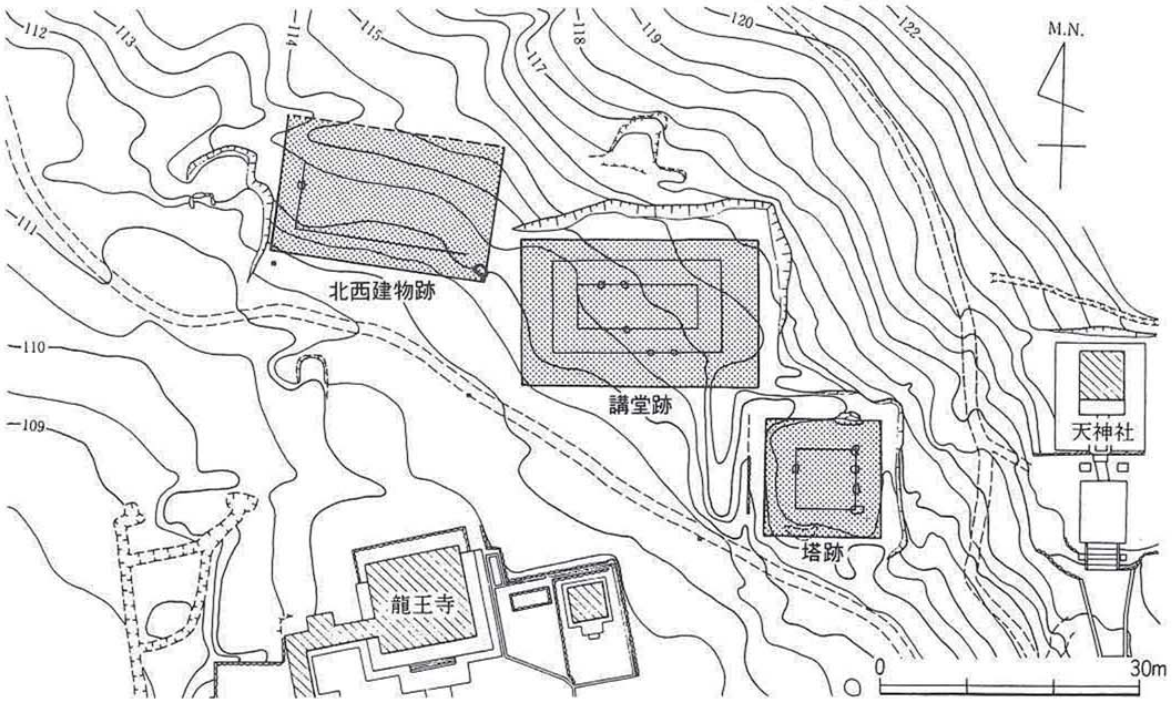

図４　雪野寺跡の伽藍

とくに土師器の灯明皿のほか、須恵器の食器類が目立っています。これらの遺物は、この建物が食堂、僧坊といった僧侶の活動に関わる施設であることを示しています。

雪野寺跡の伽藍　調査の結果、明らかになったのは上述した３棟の建物のみです。伽藍配置を知る上では、金堂や中門、南門などの施設が明らかになる必要がありますが、確認された建物をもとに雪野寺跡の伽藍について考えてみましょう。

現在の龍王寺の南面築地が、塔跡や講堂跡の方向とほぼ合うことから、雪野寺跡の南限を踏襲している可能性があります。東限や北限については、塔跡や講堂跡の背後がすぐ崖になっていて、その崖上に建物が建ち並ぶ状況が考えにくいことが参考になります。西限は、北西建物の西で横穴式石室がありますので、そこまでは寺域に含まれないと考えられます。したがって、南北100mあまり、東西およそ80m程度の寺域が復原できます。その場合、講堂跡がほぼ中軸線上にありますので、金堂跡が未発見ですが、東に塔、西に金堂を置く法起寺式の伽藍配置の可能性が高いと考えられます。

《雪野寺跡の瓦》

古代寺院の性格や関係を探る資料として、屋根を葺いた瓦がよく用いられています。ここでは、雪野寺跡から出土した瓦をもとに、この寺院の性格を探ることにしましょう。

雪野寺跡の調査では、軒丸瓦４種類、軒平瓦６種類が出土しています。その中で最も代表的な組み合わせが、図５に示した複弁蓮華文軒丸瓦(1)と重弧文軒平瓦(4)のセットで、一般に川原寺式軒瓦と呼ばれているものです。その細部の特徴から、京都府相楽郡山城町の高麗寺（こまでら）跡出土のものの系譜を引くことがわかりました。次に、２の瓦は組み合う軒平瓦が不明ですが、奈良県高市郡明日香村の坂田寺跡の瓦によく似ています。そして、３の単弁蓮華文軒丸瓦と指で押圧を加えた軒平瓦(5)は、湖東式あるいは軽野廃寺式と呼ばれるもので、湖東平野の古代寺院に採用される独特の意匠をもつものです。この瓦の分布については、愛知郡に本拠をもつ依知秦（えちはた）氏との関係が想定されており、朝鮮半島からの渡来人との関係で理解されるものです。先に触れた坂田寺も渡来人である鞍部（くらつくり）氏の氏寺であり、高麗寺も南山城の渡来人である狛（こま）氏との関係、ある

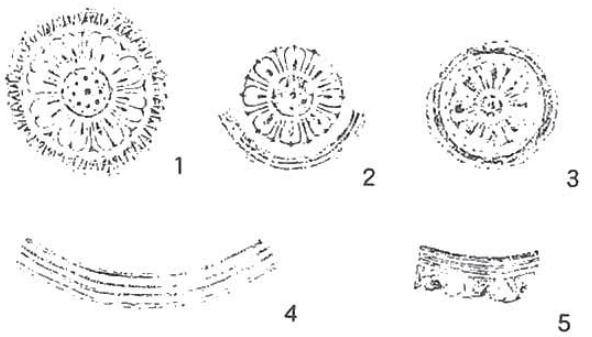

図５　雪野寺跡の瓦（縮尺１/10）

いは高句麗からの使節を迎えた高麗館（こまのむろつみ）との関係が考えられる寺院です。このように雪野寺跡の瓦からは朝鮮半島に出自をもつ人々との関係が濃厚に看取することができると言えます。雪野寺の造営者については文献に記載がありませんが、現在の龍王寺が安吉山（あきさん）という山号をもつこと、また古代の蒲生郡安吉郷に所在することなどから、安吉勝（あきのすぐり）と称した氏族との関係がうかがえます。勝というのは渡来人に多い姓（かばね）ですので、やはり瓦からの類推を支持していると考えられます。そして、大和、南山城という遠隔地とのつながりと、湖東平野に根づくローカルなネットワークの両側面が、雪野寺の瓦に反映されていることは確かだと言えます。

《雪野寺跡の意義》

崇福寺や南滋賀廃寺とならんで、雪野寺跡は近江で最も早くに調査がおこなわれた古代寺院で、そのため早くから有名でありました。しかし、古代寺院の数は、その後の調査研究の進展から激増しており、近江では60ヶ寺以上、旧蒲生郡域でも11ヶ寺が知られています。また、塑像が出土する寺院は全国で52ヶ寺を数え、決して珍しい遺物ではなくなってきました。このような点をふまえ、改めて雪野寺跡の位置づけを探ることにしましょう。

蒲生郡は、日野川流域が領域とする東西に長い郡ですが、瓦から見た寺院の性格には郡内で違いが見られます。塑像も出土した蒲生町宮井廃寺からは湖東式軒丸瓦など、雪野寺跡と共通するものもあり、蒲生町綺田（かばた）廃寺で湖東式軒丸瓦が出土しています。一方、同じ郡の北側、現在の国道８号あたりを通る古代東山道付近の寺院では、湖東式は出土しておらず、雪野寺跡出土瓦と共通する瓦を見いだすことはできません。湖東式の分布を見ると、愛知郡でも東側に集中しており、琵琶湖沿岸の寺院とは様相が異なっています。この愛知郡の東部と蒲生郡の東部との間に何らかの連絡があるものと推定できます。そこで注目できるのが、雪野寺跡の前を東西に通る「奈良道」と呼ばれる古道の存在です。いつ頃成立したのか、またその経路についても不明な点が多いのですが、日野川流域と八日市市方面を結んでいることは確かです。東山道という官道以外にも、地域を結ぶ交通路のネットワークがあったことが寺院の分布からも知ることができるでしょう。

国分寺は別として、古代の地方寺院では僧侶のための施設が明瞭になることは、あまり多くはありません。雪野寺跡では西北建物がそのような機能を果たしていると推定できました。したがって、雪野寺には僧侶がいたと推定できるのですが、奈良時代の記録からは僧侶のいない寺院が問題になっていることから、形だけの寺院も多数あったものと推測できます。そして、雪野寺跡では、奈良時代の都の瓦が補修用に用いられていましたので、都との関係を保ちつつ、寺院が維持されていたことがよくわかります。このような点から、雪野寺は古代寺院の中でも、本格的に機能を果たした寺院であり、その背景に渡来人の活動があったことが推測できます。

滋賀文化財教室シリーズ　No.196号
発行年月日　2001年３月30日
編集・発行　財団法人 滋賀県文化財保護協会
〒520-2122 大津市瀬田南大萱町1732-2
TEL(077)548-9780 FAX(077)543-1525